聖書の物語と私たち　1

秩序の形成

司祭パウロ鈴木伸明

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった（創世記第1章31節）

聖書には多くの物語がありますけれども、これらは私たちの日々とどのような関わりがあるのかを、今回から順番に見ていきたいと思います。

旧約聖書の第一頁、創世記第1章には、神様が世界を6日間かけてお造りになり、7日目に休まれた物語が記されています。世界は神様の意志によって造られ、神様の秩序に従って創造されたのを伝えると共に、私たちの生活の基本である「一週間」が神様によって定められたと語っています。創世記の記者はこのように、私たちの世界は神様の秩序によって造られているにもかかわらず、その意思に反している人間の業がどれだけ多いことかと、反省と悔い改めを促しているのです。

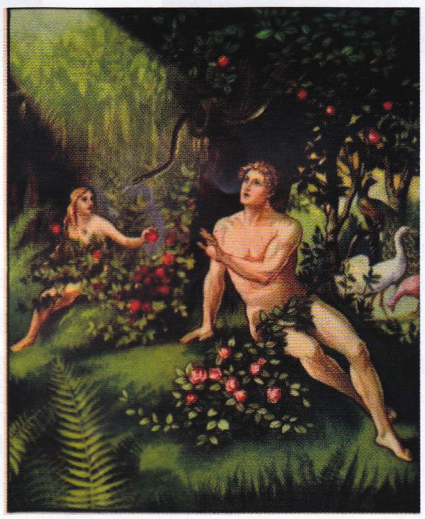
創世記2章～3章には、最初の人間アダムが神様によって土で造られ、命の息を鼻に吹き入れることで生きた者となったこと、人が独りでいるのは良くないと、あばら骨から女性を造り出した物語が記されており、結婚は人間が罪を犯す前に神様によって定められた尊い業であることが示されています。女性はアダムによってエバ（命）と名付けられます。

二人はエデンと呼ばれる園に住まわされ、神様からどの木の実を取って食べてもよいが、園の中央にある木の実だけは食べてはいけないと言われ、忠実に守っていました。ところがある日、蛇が唆（そそのか）します。女性が改めてその木を見るといかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していました。そこで女性は実を取って食べ、一緒にいたアダムにも渡したので、彼も食べました。その瞬間、二人は裸であるのに気づき、いちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆いました。

この物語、皆様もよくご存じではないかと思います。聖書は、これが人間の犯した最初の罪であると言っています。では、二人の罪とは何だったのでしょうか。その答えは、神様と二人の会話に書かれています。

神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか。」

アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」（創世記3章11節～13節）



このように、神様との約束を破ってしまったのが罪だったのではありません。約束を破ってしまったのを率直に認め謝ったならば、神様は赦してくださったのです。しかしアダムは、「実を食べてしまったのは自分の責任ではない、女性が取って与えたので食べたのだ、しかもこの女性と共にいるように定めたのは神様ではないか」と、直接の責任を女性になすりつけ、間接的には神様のせいにまでしたのです。さらに女性は、「蛇がだましたりしなければ、このようなことにはならなかった」と言っています。

このように、人間が最初に犯した罪、すなわちどの人にも奥深く入り込んでいる罪は「人のせいにすること」であると言っているのです。人のせいにすることをもう少し正確に言いますと、「自分中心」「自己中心」ということになります。創世記の記者はこの記事を書きながら、「人のせいにしたことがない人がいるのでしょうか、自己中心でないと胸を張って言える人がいるでしょうか、人のせいにして人を傷つけたことなど一度もないと言える人がいるでしょうか、いないとすれば、私たちはアダムとエバと同じ罪を負って生きています。そのことをしっかり覚え、反省しながら生きていかなければ正しくは生きられない」と、時代と距離を超えて私たちに伝えています。

二人はエデンの園から追放され、労働しながら生きていくことになると共に、女性には産みの苦しみが定められました。人間はすべて、神様の秩序のうちに生きているのだと、旧約聖書は最初に語っているのです。

（川越キリスト教会牧師）

聖書の物語と私たち　2

雲の中の虹

司祭パウロ鈴木伸明

わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる（創世記第9章13節）

創世記6章には、「ノアの箱舟」の物語が記されています。神様は地上のすべての存在を創造されましたが、「この地は神の前に堕落し、不法に満ちていた（創世記6章11節）」と書かれている通り、人間は神様の意志に従って歩もうとせず、秩序は失われ、地上に悪がはびこる一方でした。神様は「わたしはこれらを造ったことを後悔する（創世記6章7節）」と言われ、地上から拭い去ることを決心されます。しかし、神様はノアに、箱舟をつくってノア一族および選ばれた生き物を入れるようにと命じます。聖書の記述によれば、箱舟は3階建て、長さ135メートル、幅22・5メートル、高さ13・5メートルで、私たちが想像するよりはるかに大きかったのです。

洪水は一年におよび、箱舟はアララト山の上に止まりました。箱舟を出たノアは、神様のために祭壇を築き、すべての清い家畜と清い鳥のうちから、焼き尽くす献げ物を選んで祭壇の上にささげました。神様は宥めの香りをかいで、「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」と御心に言われたと記されています。そして神様は、雲の中に虹が現れる時、「わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない」と約束されました。すなわち雲の中の虹は、生き物をすべて滅ぼすことはないと、神様とノアたちによって結ばれた、約束（契約）のしるしだったのです。

2011年5月30日（月）、東日本大震災ボランティアのため福島県の小名浜を訪れました。この日は季節外れの台風到来で悪天候のため室内作業となり、数日後に行われる写真展の準備を行うことになりました。この写真展は、近隣のホームセンター二階の一画を借り、津波による被災地から回収された写真を展示して行うもので、来場者が自分の写真や関係者の写真を見つけた場合には、自由に持ち帰ってよいとの企画でした。

海岸の近くで楽しそうに遊んでいる幼い兄弟の写真、結婚式の写真、成人式と思われる三人姉妹の写真など、写っていたのは地震直前まで当たり前の日常が続いていた小名浜の人々でした。

ホームセンターのお客さんたちが私たちの作業を眺めていきます。写真展は数日後で今日はまだ非公開ですが、関係する地区の写真を眺めていく人が多くおられました。そして「江名地区は全部流されてしまったからねぇ」とつぶやく人がいました。

土台が傾いた家　小名浜　永崎地区

写真に写っている人たちが無事に避難したかどうか知ることもできませんが、それはかなり難しいのが現実なのだと痛感させられました。

帰り道、小名浜港の横を通ると海の彼方に虹が見えました。台風が去り、天気が急速に回復してきたからでしょうか。海上はまだ雲に覆われていましたが、その中に虹が輝いていました。

全地から悪が滅ぼされ、雲の中に現れた虹を見たノアたちは、この時何を思ったのでしょうか。聖書はこの物語の後、バベルの塔について語り、ノアの子孫がセムの家系、テラの家系と続き、そしてイスラエル民族の父となるアブラハム（アブラム）へとつながっていったと記すのみでこの時のノアたちの心境について多くを語っていません。小名浜の人々は、今日どのような思いの中でこの虹を見ているのだろうかと考えさせられました。

ノアたちも命長らえたとはいえ、生活の基盤をすべて失ってしまったことに変わりはなく、神様からの恵みと導きを祈り求めるのみだったのではないでしょうか。

津波の甚大な被害を受け、土台が傾いたまま放置されている家に言葉を失いつつ、現地に身を置き自分の出来ることに取り組む大切さを痛感した一日でした。

（川越キリスト教会牧師）

聖書の物語と私たち　３
アブラハム

司祭パウロ鈴木伸明

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは、妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで、加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。（創世記11章27節から12章5節）

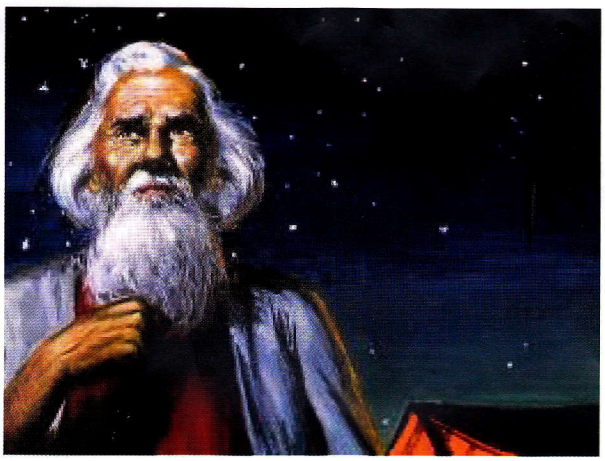
創世記で有名なアブラハム、アブラハムはもともとアブラムと呼ばれていました。アブラハムは創世記17章5節で神から、『あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい』と言われるまでアブラムという名前だったのです。アブラハムの意味は「多くの国民の父」ですが、アブラムは「高貴な父」という意味になります。

アブラムはメソポタミア文明に属するウルで生まれ育ちました。聖書の主な舞台でありますカナンで生まれたのではないのは興味深いことです。アブラムは神の命によって生まれ育った故郷を離れ、全く知らない土地へ行くことになったのでした。アブラムとその一族は迷わずに住み慣れた故郷を離れ、ウルからハラン へ、そしてカナンの地へと進みます。ウルからハランは直線距離で約９百km、ハランからカナンまでが同様に約６百kmです。交通機関も電気もない当時、その旅は困難で大きな不安を伴うものであったに違いありません。しかしアブラムは神の言葉に従い、神の守りを信じて、信仰をもってカナンの地へと向かったのでした。

アブラムたちは目的地カナンへ着いたものの、カナンが当時飢饉であったことからさらに先へ進み、一時エジプトへ行ったと記されています。指示された地へ到着してみたらとても生活できる状況ではないのを知り、アブラムたちはどんな気持ちだったでしょう。それを乗り越えようやく約束の地カナンへ定住することになったのでした。

アブラムがハランを出発したとき75歳、それから24年が過ぎアブラムが99歳になった時、神はアブラムと契約を結ばれました。

アブラムが99歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」アブラムはひれ伏した。神は更に、語りかけて言われた。



「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」（創世記17章1節から8節）

こうしてアブラムは神によってアブラハムと呼ばれるようになりました。最初の族長の誕生です。そして神はアブラハムと以下２点の契約を結ばれたのでした。

●カナンの土地を与えること。
●子孫が多く与えられて国民が形成される。

神はアブラハムとサライに子供を与えられました。その際サライはサラと名前を変えられ、生まれる子供をイサク（彼は笑うの意味17章19節参照）と名付けることを命じられたのでした。アブラハムが１００歳になった時、約束通り男の子が誕生し、二人は神にこの恵みを感謝して、イサクと名付けたのです。

（川越キリスト教会牧師）

聖書の物語と私たち　4

イサク

司祭パウロ鈴木伸明

神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」（創世記22章2節）

アブラハムとサラの間にイサクが誕生しました。長年子どもが与えられるのを願いつつもかなえられず、高齢になっていた二人にとって、それは嬉しいという一言ではとても表せない喜びでした。イサクは順調に成長し、両親にとってその成長を見守るのは何よりの楽しみだったでしょう。

そのアブラハムに、神様は大変なことを命じられました。それが冒頭の聖書の箇所です。待望のイサクが生まれたにもかかわらず、神様はそのイサクを礼拝で焼き尽くしなさいというのです。ちなみに当時の礼拝は、祭壇を築いてその上に動物を乗せ、それを焼き尽くすのが通例でした。火をつけますと肉が焼けるにおいと煙が立ち上ります。その匂いと煙に合わせて祈りをささげ、神様のもとへ届くようにと願ったのです。動物を焼き尽くすのは神様にすべてをささげるのを表しています。すなわちイサクを焼き尽くしなさいというのは、イサクを礼拝の供え物として命をうばってしまうことになります。父アブラハムの衝撃と当惑はいかばかりのものだったでしょう。

神様の命令をイサクには告げず、アブラハムは薪（たきぎ）の用意をして朝早く出発し、イサクを連れて礼拝をささげる山に向かいました。3日間の道程です。イサクも礼拝の所作については熟知していましたので、礼拝で用いる火と薪はあるけれども供え物の動物がないことに気づき、父アブラハムに尋ねます。**「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか」**（創世記22章7節）。それに対してアブラハムは、**「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる」**（創世記22章8節）、と神様の命令には触れず、目的地へ歩を進めました。

モリヤの地の目的地に到着しました。アブラハムはイサクを縛って祭壇の薪の上に乗せ、刃物をもって手を下そうとします。その途端、神様の声がしました。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」（創世記22章12節）。神様がアブラハムに、息子イサクを礼拝で供え物としてささげなさいと言ったのは、アブラハムがこれから民を導き、族長として生きていくにあたって、どんなことがあっても神様に従うとはどういうことなのかを、アブラハムが学ぶためだったのです。

アブラハムが改めて見渡しますと、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていましたので、アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、神様へのささげものとしました。

イサクの母サラは、127歳で亡くなります。サラに限らず創世記に出てくる人物は皆とてつもない年齢まで生きています。この理由についてはよくわかっていませんが、有力な説では、一年の長さが現在とは異なっていたためと言われています。創世記にはサラの死を悲しむアブラハムの様子が23章に書かれています。

月日が過ぎ、アブラハムは多くの年を重ね老人となりました。そんなある日、アブラハムはイサクの結婚を考え、自分の故郷から妻を迎えたいと、家の全財産を任せている年寄りの僕に頼みます。僕はアラム・ナハライムのナホルの町に出かけていき、泉の傍らで、アブラハムの兄弟ナホルとその妻ミルカの息子ベトエルの娘リベカと出会います。この出来事は創世記24章に詳しく書かれており神様がリベカをイサクの妻として選んだと記しています。

リベカは僕と共にカナンへ行き、イサクの妻となりました。イサクはリベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得、族長時代も次の段階を迎えることになったのです。

（創世記22章2節）

（川越キリスト教会牧師）